

本日の学び:「おいしい料理と祝福」 テキスト:創世記27章18-29節(参照27:1-17)

【理解の手がかりとして】

イサクは年老って、自らの死期を悟り、エサウを祝福し、族長の地位を譲ろうと考えた。そこでエサウを呼び、料理を持ってこさせること、そこで祝福を与える約束をした(27:3-4)。この会話を聞いていたリベカは、かねてからヤコブに祝福を受けさせたかったため、すぐヤコブを呼び、計略をはたらかせる。ヤコブはエサウと違って毛深くなかったため、エサウの晴れ着と共に、子山羊の毛皮でイサクを欺き、祝福を勝ち取ろうと考えたのであった。

目のかすんでいるイサクは、ヤコブが持参したご馳走を食べ、ヤコブをエサウと思い込み、祝福を受けてしまう。そこへエサウが野から帰ってきて、事の次第を入り、自分にも祝福をほしいと熱心に頼んでみたが、それはできないことを知り、悔しがって言った。「彼をヤコブとは、よくも名付けたものだ。これで二度も、わたしの足を引っ張り(アーカブ)欺いた。あのときはわたしの長子の権利を奪い、今度はわたしの祝福を奪ってしまった」(27:36)と。そしてエサウは声をあげて泣き、ヤコブを憎み、ヤコブを殺そうと心に決めた。そこでリベカは、ヤコブを自分の故郷にある兄ラバンのもとへ逃れることを勧めた。

以上が本課のテキストの前後を含むところの概観である。実に人間の仕業臭く、人間の思惑がうごめく出来事である。この27章は全体が基本的に「ヤハウエ資料」(「人間に関心を持ち、人間の理解に深く鋭いものが(ある)」)と考えられている。「イサクの一家は、愛憎のみにくい争いが渦巻いた。…自分の長子を取りちがえて祝福をさずけた愚かな父イサク、…夫をだましてまでもヤコブを溺愛した母リベカ、人はよくても感覚的欲望だけを満足させようとしたエサウ。目的のためには手段を選ばなかった狡智にたけたヤコブ」(原栄作)という物語(人物)評は、この物語から受ける率直な印象である。

では、もう少し登場人物たちの言動について考えてみよう。上記では「目的のためには手段を選ばなかった狡智にたけたヤコブ」と紹介したが、母リベカの計略の中で、ヤコブにはそのようにして父イサクをだますことに対して良心の呵責が見え隠れている。平たく言えば「乗り気でなかった」のである。

しかしそのヤコブの躊躇いを越えて、物語は進行する。その中で母リベカの役割はとても大きなものであった。この創世記の釈義にて再三引用する加納貞彦氏は、イサクの発言と、それを伝聞するリベカの発言の中に見る相違について、イサクの発言は「わたし自身の祝福を」(27:4)と言っているのに対して、リベカは「主の御前でお前を祝福したい」(27:7)と、そこに「主の御前」という言葉が入っていることに注目している。

そしてそこから、リベカの行動の背景には、主という存在と、主の意志というものが第一としてあり、当然に主から受けた「兄が弟に仕えるようになる」(25:23)との啓示があつてのことと理解するのである。そしてその結果、たとえ自らが「呪いを引き受け」(27:13)ても、ヤコブをアブラハムから伝わる信仰の継承者にしたかったのだらうと思われる。

とはいえ、やはりここでリベカが取った行動が良しと評されるべきではないだろう。ヤコブの父イサクに対する返答の仕方も注目する。ヤコブは「あなたの神、主がわたしのために計らってくださったからです」(27:20)と言う。これは主の名を使った偽証である。またこの出来事自体が「だまし」である。

コラムを紹介する。「ユダヤ人でユダヤ教徒のヘブライ語聖書学者であるサルナ教授は、…ヤコブ物語は全体として反面教師としてのヤコブが描かれている、と言います。…ヤコブは、後に神から『イスラエル』と名前を変えるように言われました(32:29)。創世記は、自分たちイスラエル民族の祖となったヤコブを英雄扱いして、立派な人間として描くのではなく、非難すべきは非難して正直に書いています。そういう点が、私が創世記を好きな理由の一つです。褒むべきものは神だけという信仰が背景にあるから、どんな偉人でも英雄でも、人間を神格化していないのです。」(加納貞彦)

上記コラムの観点から、私たちは聖書の物語、その主人公に対して、必ずしも正義を読み解く必要はないのだろうと思われる。不思議は不思議として、理解できない点は無理矢理な理屈で飲み込む必要はないであろう。

罪深い人間であるがゆえに、当然そこに起こる出来事の中に、私たちも自らの実際を重ねてみて、しかしそんな人間が神の民の歴史の一翼を担う者とされる、という事実の中に、主の御計画の不思議を、また憐れみを感じ取ることは出来ると思う。

### 『聖書教育』より

「この祝福がイサク個人の思いを越えていることを示しています。すなわち、先にアブラハムに与えられた祝福(創世記12:3)が、イサクからヤコブに引き継がれ、一つの家族内の愛憎劇を越えて、主の救いの逆転劇が確実に展開しているのです」(聖書の学び～祝福を受け取る者)。…この逆転劇が見据えるのは、エジプトに売られたヨセフ(ヤコブの愛息)が後に宰相となり、ヤコブ(イスラエル)一族の救済者となる、その未来である。今カリキュラム(創世記～ヤコブ物語からヨセフ物語)の意図する全体から各課の学びを捉えていきたい。